

あたらしくはいった本 (平成30年2月 貸出開始資料から)

●小説 ソロ(ラーナー・ダスグプタ/著) それ自体が奇跡(小野寺史宜/著)
復活の日(小松左京/著) アイリーンはもういない(オテッサ・モシュフェグ/著)
七色結び(神田茜/著) オーパツ死を招く至宝(蒼井碧/著)
父子ゆえ(梶よう子/著) 婚約迷走中(群ようこ/著)
牛天神(山本一力/著)

●随筆・詩などの文学 怪人江戸川乱歩のコレクション(平井憲太郎/著)
はじめての八十歳(山藤章二/著) ノンフィクション児童文学の力(国松俊英/著)
常識は凡人のもの(藤原正彦/著) 珈琲が呼ぶ(片岡義男/著)
病氣自慢(玉村豊男/著) ペコロスの母の忘れもの(岡野雄一/著)

●その他の本 文字に美はありや。(伊集院静/著)
オトナ女子あばれるカラダとのつきあい方(常喜眞理/著)
老後と介護を劇的に変える食事術(川口美喜子/著)
年表でわかる現代の社会と宗教(渡邊直樹/著)
五街道ウォークのすすめ(八木牧夫/著)



みんなの としょかん



市民図書館

TEL (921) 4646

FAX (921) 4896

<http://www.library.dazaifu.fukuoka.jp/>

としょかんカレンダー

平成30年	日	月	火	水	木	金	土
4	1	2	3	4	5	6	7
	8	9	10	11	12	13	14
	15	16	17	18	19	20	21
	22	23	24	25	26	27	28
	29	30					

○のついた日は休館日

金・土曜日(祝日を除く)は午後7時まで開館しています。

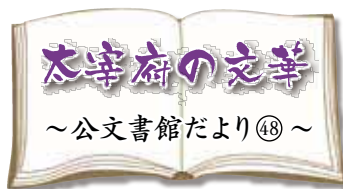


明治維新150年特集

安楽寺別当大鳥居信全

信全は、文政5(1822)年、京都に生まれました。天保3(1832)年、高辻家の養子として筑前太宰府司務別当延寿王院附弟(法統を受けつぐ弟子の意)に契約し、同6年、太宰府へと下向、その3年後に別当職を継承します。そして、嘉永5(1851)年には、「太宰府司務・天満宮留守・安楽寺別当・延寿王院主・権大僧都」となりました。

信全については、自ら記した『信全一世中略記』が遺っています。これまでは、まず天満宮安楽寺において行われた「御撫物送迎」「神忌祭」「神幸祭」、また「連歌法会」など、さまざまな宗教行事に関する事項が記されています。また、弘化4(1847)年、京仏師に依頼して、護摩堂に十二天を新造し、安政4(1857)年には、藩の許可を得て、長年の「志願」であつた「聖堂学校」の設立を始めるなど、安楽寺天満宮の整備充実にも努めています。一方、嘉永5年には御神忌九百五十年大祭を迎えて、これに専心している様子もうかがうことができます。



～公文書館だより④～

信全は、文政5(1822)年、京都に生まれました。天保3(1832)年、高辻家の養子として筑前太宰府司務別当延寿王院附弟(法統を受けつぐ弟子の意)に契約し、同6年、太宰府へと下向、その3年後に別当職を継承します。そして、嘉永5(1851)年には、「太宰府司務・天満宮留守・安楽寺別当・延寿王院主・権大僧都」となりました。

信全の実父は梅小路定尚で、五卿のひとつである三条実美の父実万は信全のいとこにあたります。また、安政5年、京都に上った折には、同じく五卿のひとつで、歌道を家業とする三条西季知に就いて和歌を学んでいます。こうした由縁もあって、信全は五卿の寓居として延寿王院を提供するなど、彼らの太宰府滞在にはことに意を用いました。

慶応3(1867)年、五卿の復官帰洛を目前にして、別れを惜しむように五卿と信全の間で和歌の贈答が行われています。信全の一首に「天さかるひなにはあれど三年までいましし宿を君な忘れそ(大意)都から離れた辺境の地とはいえ、3年もおられた仮の住まいを忘れないでください」

があります。これは奈良時代、筑前守であつた山上憶良が詠んだ「天離る鄙に五年住まいつつ都のでぶり忘れえにけり」(『万葉集』巻5 880番)をふまえたものです。信全は五卿に、立場こそ違え、都から遠く離れて太宰府の地にあつた古の宮人の姿を重ね合わせて、先の歌を詠んだのでしょう。

しかし、この『信全一世中略記』は、信全が別当職を信厳に譲った翌年の文久2(1862)年10月で終わっています。このあと慶応元(1865)年、文久3年8月18日の政変で、京都を追

太宰府市公文書館 重松 敏彦